

1 調査結果と指導事例の関連

問9(2) 棒グラフの要素の比較
誤答の考察
 ・「倍」を求める際に、比べられる量(被除数)を見誤っている

問5 除法の意味、問題場面の理解
誤答の考察
 ・「くばります」という言葉から除法を適用(実際には乗法の適用)
 ・問題場面の想起ができていない

問1(6) 乗法九九1回適用の除法の技能
誤答の考察
 ・計算の際に、乗法九九を除法に適用できなかったり、乗法九九の誤りがあったりする
 ・商が正しいか確認をしていない

問9(2)は、小学校4年の算数の調査において、正答率が最も低かった問題である。比較する要素(被除数)を見誤っており、除法の意味理解の定着が不十分であると考えられる。そこで、問5の除法の場面理解・意味理解の問題について見たところ、正答率は80%に満たなかった。誤答のほとんどが、問題文の言葉で式を誤って判断していた。これは、問1(6)の除法の計算技能を見る問題の正答率は90%を超えているものの、学習内容が発展したときに誤った立式をする可能性があることを示している。そこで、意味理解を深めることや既習事項を活用して問題を解決する力を育てていくことに重点を置き、実践事例として「あまりのあるわり算」の学習を取り上げることにした。

2 単元名 「あまりのあるわり算」 小学校第3学年

3 単元のねらい

算数への 関心・意欲・態度(関)	数学的な考え方(考)	数量や図形についての 表現・処理(表)	数量や図形についての 知識・理解(知)
除法を、余りのある場合でも余りのない場合と同様に、進んで問題解決に活用しようとする。	余りのある場合も除法を使って答えを求められることを、余りのない場合と関連付けて考える。	余りのある除法の計算と答えの確かめをすることができる。	「余り」の意味、余りと除数の大小関係、及び余りのある除法の仕方を理解する。

4 基礎的・基本的な内容の定着を図るための手だて

< 教材研究 >

本単元における基礎的・基本的な内容と既習事項の関連

既習の基礎的・基本的な内容	本単元における基礎的・基本的な内容
除法などの計算を適用し、問題を解決しようとする態度。	既習事項を活用して、問題解決をしようとする態度。
既習事項を用いて除法の計算の仕方を考える。	被除数が乗法九九にはないときに既習の除法などを活用して計算の仕方を考える。
乗法九九を1回用いた除法の計算技能。	余りの意味理解とそれを用いての除法の計算技能。
「包含除」、「等分除」の意味理解及び除法と乗法の関係の理解。	除法と、乗法や減法の関係及び余りのある除法の意味理解。

指導にあたっての工夫

- ・本単元の基礎的・基本的な内容である「既習事項を活用して、問題解決をしていこうとする態度」は、既習事項の定着を前提としたものである。そこで、単元のはじめに既習事項を確認する時間を設けた。問題は、調査で把握した児童の実態に応じて作成した。
- ・単元の学習で身に付けるべき内容、年間指導計画や発達段階に合わせて系統的に指導することで身に付けるべき内容を整理した。本単元では、余りのある除法の計算技能を単元内で身に付けなくてはならない。そこで、単純に計算練習をするのではなく、カードを引いてできた式を計算し、その余りの大小で勝敗を決めるゲームを取り入れ、児童が意欲をもって学習を継続できるようにした。

< 実態把握 >

観点別での実態調査

調査結果では、除法を用いる問題について、計算技能よりも、適用場面の理解や一方が他方の何倍かを求める問題について正答率が低かった。これは、問題場面を把握して式で表すことや、包含除・等分除の両方についての意味理解が十分ではないことが、理由の一つとして考えられる。そこで、実践事例の実施学級においても、観点別に基礎的・基本的な内容の定着状況についての調査を行った。

算数的活動の適切な配置

具体的な場面に基づいて意味理解を図ることが大切であると考え、児童が問題を見いだす場面を中心に、算数的活動を適切に取り入れるようにした。この際、学習内容や系統性に応じた活動であること、児童が活動に対する目的意識をもって取り組めることに配慮し、内容を工夫するとともに、十分な時間を確保するようにした。

< 指導と評価の一体化 >

オリエンテーション、「確認の時間」

既習事項の確認の時間では、児童自身がカードを見て各教室を自由に行き来しながら学習ができるようにした。また、学習のまとめりに、「確認の時間」を設定してそこまでの学習の定着状況を把握するとともに児童自身も自己評価ができるようにした。これを学習の習熟の時間のグループ選択に生かした。また、児童がこのような学習の仕方を理解して主体的に取り組めるように、単元のはじめにオリエンテーションを設定した。

少人数学習集団による指導

本単元での基礎的・基本的な内容を単元全体の指導計画にバランスよく配置し、その内容について児童の具体的な姿を想定して評価規準とした。そして、児童の状況に応じた支援の仕方考えた。単元の終末では、一人一人の児童により細やかに対応するために、少人数学習集団での学習の時間を設定し、個々の支援計画を立てた。「確認の時間」の「ふりかえり問題」と「自己評価カード」により学習内容を設定するとともに、それぞれのグループ内の学習でも、1時間目の定着状況を次の時間に生かすことを考えた。

5 指導と評価の実際（8時間扱い）

単元の流れ	学習活動（ ）と指導上の留意点（ ）	基礎的・基本的な内容
<p>オリエンテーション、既習事項の確認の時間（1時間）</p> <p>学習の流れを知るとともに、既習の基礎的・基本的内容を確認する。</p>	<p>1 学習の流れを知り、既習事項の確認をする。</p> <p>オリエンテーションで、学習の流れを知る。</p> <p>コース別の学習コーナーを自分の考えで移動しながら、既習事項の復習をする。</p> <p>児童の実態にあわせてコース設定をしておく。</p> <p>基本的に児童が自分で学習を進めたり、コースを選択したりして、学習の進め方に慣れることも考慮する。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>既習事項</p> <p>乗法九九やあまりのないわり算における意味理解、計算技能、計算の仕組み</p> </div>
<p>第1次 ($2 + \frac{2}{3}$ 時間)</p> <p>乗法九九を1回適用してできる除法で、余りのある場合の計算方法を理解する。</p>	<p>2 包含除の場合の余りのある除法の計算方法を理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-left: 10px;">60分</div> <p>「ボール集めゲーム」(次ページ)を行う。</p> <p>ゲームを通して除法を体験することで、問題場面を実感もって理解できるようにする。</p> <p>余りが出る場合と出ない場合が適度に表れるようにする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> <p>「ボール集めゲーム」で、あまりが出るようにするにはどうしたらいいだろうか。</p> </div> <p>包含除の場合の余りのある除法の問題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>人で「ボール集めゲーム」をします。こずつ集めると、いくつの組ができて、何このボールがあまるでしょうか。</p> </div> <p>それぞれの方法で、問題を解決する。</p> <p>それぞれの解決方法について検討をする。</p> <p>余りのある除法の計算方法を確認する。</p> <p>最後にまたゲームを行い、余りのある除法の場面の理解を深めるようにする。</p>	<p>関 既習事項を問題解決に活用しようとする態度</p> <p>考 余りのある除法と余りのない除法とを関連付けた思考</p> <p>表 余りのある除法の計算方法</p> <p>知 余りのある除法の意味の理解</p>
	<p>3 等分除の場合の余りのある除法の計算方法を理解する。</p> <p>等分除の場合の余りのある除法の問題を解決する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>イチゴが24個あります。5人に同じ数ずつ配ると、1人分は何個になりますか。</p> </div> <p>児童の経験を基に、適切な等分除の場面を設定する。</p> <p>それぞれの方法で問題を解決し、検討を行う。</p> <p>包含除と同様に、場面の理解を大切にするとともに、具体物の操作などにより意味理解を深めるようにする。</p> <p>余りのある除法の計算方法を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-left: 10px; margin-top: 10px;">「確認の時間」</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-left: 10px; margin-top: 10px;">15分</div> <p>第1次の学習内容の定着状況を確認する。</p>	<p>関 既習事項を問題解決に活用しようとする態度</p> <p>考 包含除と等分除を関連付けた思考</p> <p>表 余りのある除法の計算方法</p> <p>知 余りのある除法の意味の理解</p>

評価規準と支援（ 発展的 補充的 ）	指導上の工夫・児童の様子など
<p>表 等分除や包含除の問題を解いたり、問題をつくったりしている。</p> <p>知 等分除と包含除の意味を理解している。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>それぞれのコースで、補充的な支援が必要な児童を中心に、担当の教師が支援を行い、ここまでの学習の習熟の差を少なくするようにする。</p> </div>	<p><u>既習事項の確認の時間のコース別学習</u></p> <p>【包含除と等分除の区別問題に取り組むコース】</p>  <p>等分除と包含除の問題例と問題のつづりを用意した。児童は、各問題が例のどちらと同じ場面の問題かを解答した。</p> <p>【除法の適用問題に取り組むコース】</p>  <p>問題を、難易度順にかごに入れておき、児童はかごに書いた番号順に問題に取り組んだ。解答の確認も児童が行い、教師は机間指導をした。</p> <p>【除法を適用する問題づくりをするコース】</p>  <p>除法の問題として成立するかどうか、担当教師がチェックをした。合格したものは、適用問題コースの問題がすべて終了した児童用の問題にした。</p>
<p>関 余りのある除法の問題場面をとらえ、具体物を用いて問題を解決しようとしている。</p> <p>具体物を用い、考えたことを式に表したり説明を加えたりするように助言する。</p> <p>おはじきなどの具体物を用いて考えるように助言する。</p> <p>考 余りのある除法の計算方法を、具体物の操作などを通して考えている。</p> <p>既習の除法、乗法九九につながることに気付かせる。</p> <p>「ボール集めゲーム」を想起させ、具体物の操作から考えるようにする。</p>	<p><u>第1次の算数的活動</u></p> <p>「ボール集めゲーム」のルール</p> <p>一人1つずつボールを持つ。リーダーの唱えた数でボールを集める。残ったボールの持ち主が次のリーダーになる。</p> <p>【ゲームで場面理解を図る】</p>  <p>割り切れる数が続いて進行が滞ったときに、子どもつぶやきが聞こえた。「じゃあ、割り切れちゃうからだめだよ。」「では、割り切れないのはどんな時だろう？」教師は、問題が明確になった瞬間を逃さないようにする。</p>
<p>表 余りのある除法の場面を式で表したりよんだりすることができる。</p> <p>図や絵を用いて、式を説明できるようにする。場面をイメージさせながらおはじきなどの具体物を操作する活動を行い、商や余りがどれにあたるのかを把握できるようにする。</p> <p>知 余りのある除法の意味を理解している。</p> <p>包含除、等分除を問わず、様々な場面で立式ができるようにする。</p> <p>「同じ数ずつ配る」場面を実際に行って場面のイメージをさせる。</p>	<p>【おはじきを操作して意味理解を深める】</p>  <p>実際の場面をしっかりとイメージしながら操作を行うことで意味理解が深まり、数の感覚が豊かになる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>① 36÷9 ② 40÷8</p> <p>2 3人で、20このブロックを同じ数ずつに分けると、一人1人はいくらになりますか。</p> <p>【しるし】</p> <p>【たえ】</p> <p>3 下の「と」を渡った後から、あてきのあるわり算の問題を書きまわそう。</p>  <p>【第1次のふりかえり問題の一部】</p> </div>

単元の流れ	学習活動()と指導上の留意点()	基礎的・基本的な内容
<p>第2次 ($2 + \frac{1}{3}$ 時間)</p> <p>余りと除数の大小関係を理解する。余りのある除法について確かめの仕方を知る。</p>	<p>4 余りと除数の大小関係を理解する。</p> <p>友達とペアを組み、「わり算ゲーム」()をする。</p> <p>対戦相手との計算技能の定着状況の違いに配慮して、計算が苦にならないようにする。</p> <p>余りの大きさに着目して、ゲームの式をノートに記録する。式に表して計算することを大切にして、ノートに対戦の記録をさせる。それを用いて確認・検討ができるようにする。</p> <p>あまりの大きさやあまりのでかたには、何かきまりがあるのだろうか。</p> <p>余りと除数の大小関係についてまとめる。</p> <p>引き続きゲームを行い、導き出した大小関係を確かめる。</p> <p>5 余りのある場合の除法について、確かめの仕方を知る。</p> <p>友達とペアを組み、「わり算ゲーム」をする。</p> <p>あまりのあるわり算の計算は正しくできるだろうか。互いに確かめる方法を考えてみよう。</p> <p>乗法、減法を使えば確かめられることを確認する。</p> <p>答えの確かめ方を知り、引き続きゲーム形式で練習する。</p> <p style="text-align: center;">「確認の時間」</p> <p style="text-align: right;">15分</p> <p>第2次の学習内容についての定着状況を確かめる。</p> <p>ここまでの学習内容の定着状況を自己評価し、第3次の学習コースの希望を出す。</p> <p>児童の希望と教師の評価が異なる場合には、児童と教師が相談をして、コースを変更するなどの配慮をする。</p>	<p>表 余りのある除法の計算技能</p> <p>知 余りの意味の理解</p> <p>表 余りのある除法の計算技能</p> <p>知 余りのある除法の答えの確かめ方</p> <p>知 除法と乗法、減法との関係</p>
<p>第3次 (2時間)</p> <p>余りのとらえ方について理解を深めるとともに、学習内容に習熟する。</p>	<p>6 7 余りのとらえ方について理解を深めるとともに、学習内容に習熟する。</p> <p>第2次までの学習の定着状況から、コース設定と問題の選定を行う。</p> <p>学習の進め方を知り、コース別に分かれて学習を進める。</p> <p>コースごとに、それぞれの児童の実態に応じた指導をする。特に、補充的な学習に取り組む場合は、一人一人に基礎的・基本的な内容の定着が図れるよう、一人一人の学習の定着状況に応じて指導をする。</p> <p>第3次の1時間目が終わってコースが合わないときには、児童と教師が相談をして、変更できるように配慮する。</p>	<p>関 余りのある除法を実際の場面に生かそうとする態度</p> <p>考 問題場面に応じた余りの処理の仕方</p> <p>表 余りのある除法の計算及びそれを用いた問題解決</p>

評価と支援（ 発展的 補充的）

考 除法計算を通して除法の意味理解を深めながら、余りの大きさについて考えている。

被除数や除数を変えて計算を数多く行うことによってより確かな考えにする。

具体物の操作によって、余りの意味理解を確かにし、除数と余りの関係を実感させる。

知 余りが除数より小さくなることを理解している。

規則性や、除法の意味を踏まえて説明できるようにする。

シート1の計算をすべて行って確かめる。

表 余りのある除法の答えを求めて、確かめることができる。

シート2だけでなく、20以上の被除数についても数多く計算を行うようにする。

シート1や小さな数で計算したり、具体物の操作をしたりして、乗法九九を用いて除法の計算をしていることを実感させる。

知 除法や乗法と減法との関係について理解している。

図や絵を用いて、自分なりの式に表して説明できるようにする。

除法計算の際に、具体物を用いながら九九を唱えるなどして、その関係を実感させる。

発展的な学習に取り組むグループは、一人一人の児童について、その学習状況を評価していく。

開 進んで除法を問題解決に適用しようとしている。(6, 7)

考 余りの処理の仕方を、問題場面に応じて考えている。(6, 7)

表 求めた商や余りを適切に処理することができる。(6)

表 除法計算(九九1回適用余りあり)ができ、それを用いて問題を解決することができる。(7)

補充的な学習に取り組むグループは、一人一人の児童について評価規準を用意する。

指導上の工夫・児童の様子など

第2次の算数的活動

「わり算ゲーム」のルール

カードを引いて、シートの のところに置く。
できた除法の計算をする。
余りの大きい人の勝ち。

シートと0～9のカードを用意する。
シート2の場合、除数が0と1にならないように配慮する。

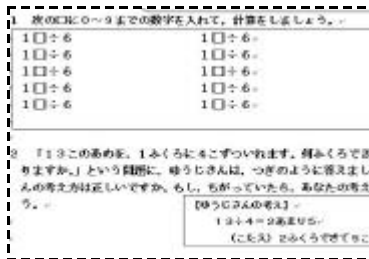
【シート1】

$$1 \div 4$$

【シート2】

$$1 \div$$

シート2は、第4時の後半の時間又は第5時の前半の時間に、児童の実態に合わせて取り入れる。また、前半と後半で対戦相手を変更するなどして、児童の興味・関心を維持しながら計算技能の習熟を図る。



【第2次のふりかえり問題の一部】

第3次の少人数学習集団での指導

補充的な学習を中心に組み組んだ。

補充的な学習から発展的な学習まで取り組んだ。

自力解決を中心に数多くの発展的な学習に取り組んだ。



コースごとに、それぞれの児童の実態に対応した指導を行う。特に、補充的な学習に取り組む場合は、一人一人に基礎的・基本的な内容の定着が図れるように、指導の重点と手だてを用意し、個別に学習を進める意識をもつことが必要である。

【補充的な学習に取り組むグループの評価規準の一部】

発展的な学習状況	関心・意欲・態度	算術的知識の定着	基礎・技能	問題の理解	問題の解決	算術的知識
4分：基本事項の理解が深まっている。			余りのある除法	基本事項を用いた	問題場面に応じた	意味理解
5分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
6分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
7分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
8分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
9分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
10分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
11分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
12分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
13分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
14分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
15分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
16分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
17分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
18分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
19分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解
20分：状況に応じた説明が出来る。			状況に応じた	基本事項を用いた	基本事項を用いた	意味理解

一人一人の評価規準、指導の重点などを明らかにして、その児童の課題に応じた問題を用意しておく。

[考察]

< 教材研究 >

本単元における基礎的・基本的な内容と既習事項の関連

- ・本単元における基礎的・基本的な内容を、既習事項との関連という視点をもって観点別に明らかにすることにより、教師は、この単元で求められる児童の具体的な姿をイメージすることができた。これにより、単元の学習で身に付けるべき内容やそれを支える既習事項を指導計画に適切に位置付けるとともに、各時間の活動内容を工夫していくことができた。

指導にあたっての工夫

- ・学習前に身に付けているべき内容や本単元の学習で身に付けるべき内容、そして教科の全体計画や年間指導計画に合わせて系統的に指導することで身に付けるべき内容を整理できたので、既習事項の確認の時間や繰り返し計算の練習をするためのゲームを取り入れるなどの工夫を計画的に行うことができた。特に、計算の練習のための「わり算ゲーム」では、ほとんどの児童がノートのページいっぱいに式を書いて、数多くの計算を行った。同じ問題に何度も繰り返し取り組んだり、計算方法に迷うときには児童同士で教え合ったりする姿が見られたのは、ゲーム性を取り入れた効果であると考えられる。

< 実態把握 >

観点別での実態調査

- ・教材研究により明らかになった観点別の基礎的・基本的な内容を基に実態調査を行った。これにより、「表現・技能」や「知識・理解」のみに偏ることなく児童の実態把握をすることができた。調査学級における市販の問題の正答率は 98%であったが、観点別に作成した問題の正答率は 86%であった。なかでも、計算の技能を問う問題ではほとんどの児童が全問正答であったのに対して、意味理解を問う問題においては、乗数と被乗数や除数と被除数を逆にして立式していた誤答が、乗法については 78%、除法については 20%あった。そこで、意味理解を問う問題を中心に学習を進めていくように、指導計画を立てて、学習を進めていった。その結果、指導後に行った意味理解を問う問題に対して、立式においてはすべての児童が正しく解答することができた。

算数的活動の適切な配置

- ・単元の導入で、余りのある除法の場面理解を図るための体験的な算数的活動「ボール集めゲーム」を取り入れた。このことにより、児童が除法における「割り切れない」場面を実感することができた。次に、意味理解を深めるために、おはじきなどの具体物を用いた算数的活動を取り入れたことも効果的であった。児童は、体験した「割り切れない」というイメージをもって、机上でおはじきの操作をしながら問題解決に取り組むことで、除法の意味理解を深めていった。特に、単元の終末で補充的な問題に取り組んだある児童は、初めの頃は除数と余りの大小関係などを誤って計算をしていたが、学習が進むにつれて自らおはじきを使って確かめながら計算に取り組み、意味理解を深めていくようになった。
- ・単元の終末で学習内容を活用する応用的・発展的な算数的活動を取り入れたことは、余りのある除法の活用範囲を広げ、意味理解を深めたと考えられる。単元終了後に除法を使っ

た問題づくりを行った結果、包含除・等分除の両方の場面の問題をつくった児童の割合は、指導前の 33%から 51%に上昇した。また、設問では余りのある除法の指定はしなかったが、85%の児童が余りのある除法の問題をつくっていた。さらに、児童の学習状況によって答えが(商 + 1)になる発展的な問題を与えたところ、全体の 20%の児童が問題づくりに取り入れていた。

< 指導と評価の一体化 >

オリエンテーション、「確認の時間」

- ・オリエンテーションを設定し、児童が学習について見通しをもてるようにした。授業後の感想からは、「自分でコースをえらんだことで学習がしやすくなった。」という回答が学級全体の 89%あった。児童自身が選択をして学習を進められるようにすることは効果的であり、そのためのオリエンテーションは重要な位置を占めると思われる。
- ・「確認の時間」での定着状況から、習熟の時間の少人数学習集団の学習内容を設定した。児童自身も、自分の課題をほぼ把握できていたため、教師の評価とほぼ等しい学習内容を選択した。教師の評価と異なる場合は、ここまでの定着状況を「確認の時間」の「ふりかえり問題」などを基に話し合い、適切なコースを選択させることができた。

少人数学習集団による指導

- ・発展的な問題に取り組むグループには、問題を数多く用意し、児童自身が自らの理解度や興味などに合わせて学習進度を決定できるようにした。その結果、児童の活動がより主体的となり、競い合ったり教え合ったりする姿や一つの問題にじっくりと取り組む姿などが見られた。また、自主的に問題を持ち帰って保護者とともに考えてくる児童もいた。一方、児童の学習活動がより多様になり、グループ内で一人一人に対応した適切な指導をすることがさらに重要になった。
- ・学習の習熟を目指すグループでは、児童一人一人の学習の定着状況に応じた問題を計画的に教師が提示した。このように、一人一人に対応した指導の結果、それぞれの児童に意欲の向上が見られ、半数以上の児童が教師の予想した数を超える問題に取り組み、児童が自力で問題を解決する量が増えていった。この反面、発展的な問題に取り組むようになった児童があまり見られなかったので、発展的な問題に取り組むグループの児童との交流によって、児童同士が高め合うことも視野に入れていく必要性を感じた。
- ・補充的な問題に取り組んだグループでは、2人の児童が学習の習熟を目指すグループへコース変更をする成果が見られた。このうちの1人は、計算技能に不安があったため、計算問題に数多く取り組んで技能の習熟を図ったところ、授業後の感想に、「算数はキライだったけど、楽しくて、じしんがつかしました。」と書いている。
- ・単元終了後の感想では、87%の児童が「自分の学習のしかたに合っていたと思う。」と答え、92%の児童が「みんなで同じように学習するよりもわかりやすかった。」と答えた。適切なコース選択をすることが児童の学習意欲を高め、基礎的・基本的な内容の定着につながったと考えられる。